

振り返った啓雲の顔は、砂漠でみつけた一粒の砂金のように輝いて見えた。

仇討の母娘を見捨ててしまった罪悪感に打ちのめされていたミチには、目の前の壮年の僧はとてつもなく頼りになる存在だった。

すがるような表情だったのかも知れない。啓雲はミチの言葉を待つように一呼吸おいて

「権六を助けてくれたそうですね」と言った。

山中へ向かう途中で出会った農夫は名を権六というのか、どうやら無事虫谷に戻ったようだ。小さな安堵がミチの気持ちを少し軽くした。俱利伽羅の山中ではぐれた仲間はどうしただろう。

啓雲の話では、はぐれた他の三人は落ち合うはずの道案内に会うことが出来ず、諦めて先に虫谷へ帰っていた。

権六が村に辿り着いた時はちょうど役人の取り調べが始まった時だった。役人の姿に気付いた権六は、咄嗟にそこいらのフキやツワを一抱えも摘むと、それを小脇に素知らぬ顔で村に入った。

役人達は、権六が山菜取りから帰ったものと、何の疑いも持たず素っ気ない一瞥をくれただけだった。

一人も欠けることなく村人全員が揃っているので、役人達

は拍子抜けした表情で帰って行った。

一人のところが人も出さずに済みはしたものの、年貢の問題は何も解決しないままだった。

啓雲はミチから受け取ったお金と自分の懐の総てを置いて早々に村を離れた。

長居をすればそれだけ村の食糧が減ることになる。あとは仏にすがるか道は無いと言った啓雲の顔は曇っていた。

上田に行くという啓雲と街道で別れた。また何処かで偶然出会うことがあるといいですね、そう言って歩き始めた啓雲を、ミチは並木の陰に姿が見えなくなるまで見送った。

世の中には手に負えないことの何と多いことか。柏原へ引き返すミチの胸の中に、穏やかだった田耕の暮らしが蘇った。優しかった利之助が、わび助の苗木を植えながらミチを振り返った笑顔が、今でもミチの胸を熱くする。

姨捨で、山をも流してしまいそうな大雨に遭って以来夏空が続いていた。乾いた道に照り返す陽の光が目にも痛い。

道の脇にチガヤの穂が見える。ミチは子供の頃を思い出し、まだ白い穂になっていないツバナを探して口に入れた。噛むと幽かな甘みが懐かしかった。

野尻を過ぎた辺りで日が暮れ始めた。懐が不如意なので宿場を通り過ぎたが、今夜の宿を見つけないではならない。

見つからないときには野宿でも構わない、そう考えながら

歩いて行く先に裕福そうな農家が目に入った。

庭先にしゃがんで煙管を吹かしているこの屋の主らしい男に近づいて声をかけた。

「軒先で構いませんが一晚泊めて戴くわけには参りませんか？」

すると男は大義そうにミチを振り返って「うちは旅籠じゃないんでね」と全く取り付く島がない。

引き下がろうとしたところに主の声を聞きとがめたのか、戸口から顔をのぞかせた女房らしい岩のようにガツシリとした大柄な女が

「尼さんにそんなことを言っちゃあ失礼でしょう。一晩くらい良いじゃありませんか」と言いながら表に出て来ると、ミチの手を引くようにして中へ招き入れた。

尼と聞いて男は改めてミチを振り向いたが何も言わず、もう一服煙草を吸い付けるらしく、掌に煙管の雁首をトントンと打ちつけて火種を受け、器用にその火種を掌の上で転がしている。

女房は

「さあさあどうぞどうぞ」と言いながらミチを奥に案内し「主人はこの辺りの庄屋を務めているのですが、どうもケチンボでいけません。名前は壱兵というのですが、村の者達はみんな陰でケチベイ、ケチベイと呼んでいるのですよ」と亭主の方を見やり、声をひそめて言った。

食事をいただき湯を使わせて貰うと、女房が待ち兼ねたように台所の行燈の脇にミチを誘った。

村の衆以外に話をする事の無い女房は、ミチの旅先の話をしきりに聞きたがった。

そこに顔を出した主は

「油だつて安くない。半刻したら消しなさい。」と言い捨てて寝間に入つて行つた。

翌朝、ミチのことを俳人だと知った主が短冊に一句所望した。ミチは姨捨の傳五郎夫婦の優しさを思い出し

『姨捨てた里にやさしやほととぎす』の句を書いて渡した。仕度を終えいとまを告げるミチに主は一束の紙を黙って差し出した。短冊の礼のつもりだろう。

ミチは丁重に、一晚世話になつた感謝と主の心遣いに礼を述べて紙の束を受け取つたが、

何とそれは雁皮ではなくただの鼻紙だった。

村の衆にケチベイと呼ばれるのも当然だ、とミチは苦笑いをこらえて歩きはじめた。